暗泉空談

中村真一郎

Nakamura Shin-ichirō

集英社

暗泉空談（あんせんくうだん）

一九九四年七月一〇日第一刷発行

著者　中村真一郎（なかむらしんいちろう）

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二-五-一〇　〒一〇一-五〇

電話　〇三-二二三〇-六一〇〇（編集部）

三二三〇-六三九二（販売部）／三二三〇-六〇八〇（制作部）

印刷所　大日本印刷株式会社

著者との諒解により検印は廃止いたします。

©1994 Shin'ichiro Nakamura, Printed in Japan

ISBN4-08-774080-3 C0093

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社制作部宛にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは
法律で認められた場合を除き著作権の侵害となります。

暗泉空談／目次

暗泉空談 7
仙溪綺談 33
燕京夢談 57
色後幻談 85
旧都幽談 115

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海星釣談 147
新宮妄談 171
西京戯談 195
故市鎖談 225
古城妖談 257

装画　吉岡正人
「風の吹く日」
（箱根・彫刻の森美術館所蔵）
装幀　菊地信義

暗泉空談

暗泉空談

1　雪のやどり

私が講演旅行の帰り路、急に思い付いて、もう半世紀のあいだ、毎夏を過す慣いになっている、その高原の避暑地の瀟洒な木造の駅に降り立ったのは、現代人の思考経済の原則に従った判断中止のやり方に従えば、偶然である。この時、突然にボストン・バッグを網棚から引きおろして、冷気の冴え渡ったプラットフォームへ、途中下車をしてしまったのは、勿論、最初からの計画ではないし、また確たる理由もない。気まぐれというのは、こうした衝動に与える便利な命名である。

しかし、人間にとって、あらゆる行動には原因があるものだ、というのが、私の七十年の生涯から得た教訓である。中学生のスーパーでの、安物の万引からはじめて、団地夫人の、保険勧誘員との午後の不倫も、更には流行の動機なき殺人も、そこにある「でき心」の根底を、今

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

世紀はじめのウィーンの医者が、完膚なきまでに、その心の闇の深奥の迷路に分け入り、合理的な解釈の光りを浴せて、白日のもとにこの正体を曝露してみせた。だから私も今になっては、あの思いがけない長い停車時間に刺戟されて、ふと毎夏見慣れているプラットフォームに飛び降りてしまったのには、そこに来る途中の窓の外の遠くに目に入った、昔旅中で見た覚えのある小学校の校庭の、今は冬休み中の荒涼たる風景から、真夏の光りのなかで、ポプラの梢が銀色に顫えていた、遠い戦前のあの時の光景と、それを眺めて訳もなく、胸を熱くしていた遥かな青年時代の私の心の状態の、この今の衰老の肉体のなかへの、窓外を通りすぎるごく短かい、その冬景色が視野から消えるまでの一瞬のあいだの甦りの、そのかすかに消え残った連想が、私の心に若者のような無分別な、無計画な、生活のスケジュールからの逸脱を引き起したのだという心理的分析も成り立とうし、また、丁度、昼飯時になっていて、冬の冷えた駅弁を開く憂鬱さを、ここで降りてホテルへ車を走らせれば、暖房の快くきいたグリルで熱いスープを啜ることによって免かれる可能性があるという、咄嗟の希望が脳裡にひらめいたらしい、という生活の快適さを求める老人風の思い付きの結果ではなかろうかという――「なかろうか」というのは、いま思い返してみて、そのような脳内の閃光の記憶の痕跡が全くないからだが――生理的想像も可能だし、更には、仲々動こうとしない列車の窓から、ふと目を上げて外を見た瞬間、毎年の夏の見慣れた駅名の看板が視野に飛びこんで来て、それが講演のあとの緊張の弛緩した意識の真中に落ちて来ると、突然に戦前からの長い夏の記憶の積み重なりを一時

に、心の奥から盛り上らせて来て、そして私の身体をその懐かしさの想いのなかに押し流したのだ、という抒情的解釈も不当ではないだろう。いや、更に私の人生の歩みを遡って、深い意味を求めるとすれば、少年時代の終りからの大日本帝国の歴史の進展の方向のなかで、自分の平和主義がいかに無力であり、自分がいかに臆病な非行動的な人間であるかを知らされて、自らひそかに屈辱感にさいなまれていたあいだに、日本の伝統のなかで私が最も強く同一性を感じる平安朝の貴族文明の、その宗教的根拠である「宿世」、前世の因縁つまり、目前の行動の理由が本人に自覚されなくても、その原因は前の世の人格のなかにあるという信念を次第に、私自身の生き方に最も似合わしいものと考えるようになって来ていて、だからこの突発的途中下車も、業平が愛人を鬼に食われたり、浮舟が魂の愛と肉の愛とのあいだに引き裂かれて、宇治川に身を投じて記憶喪失になったのと同じように、宿世のいたすところかという、哲学的理解さえも、原因として数えられるのである。

しかし、高が毎夏訪れる避暑地の駅に、真冬の現在、自動的に身体が動いて途中下車し、これまた馴染みの森のなかの古いホテルにタクシーを走らせて、むれるくらいに暖房のきいた階上の一室に収まった、というぐらいの些事の原因、あるいは動機について、今になってこれほどの仮説を考え出し、事実に適用して、その有効性をためしているというのは、例の老人性の冗語癖のいたすところと、読者は顰蹙するかも知れないが、実は私にとっては、この一見、気紛れな行為が、思いがけず永遠の時間のなかに触れるという経験を惹き起したからであり、そ

の時間と、今こうして私の両脚を伸ばしているわが仮の住居の炉端での、柱時計の規則的な音が示しているような、現実の時間の流れとが、どう工夫しても、ピースの紛失したジグソー・パズルの画面のように、うまくぴったりと重ね合わさらないのである。

さて、その異様な経験というのだが、端緒はあらゆる大事件同様、極めて日常的にはじまった。

私はひと気の少ない食堂の片隅で、ゆっくりと昼食を愉しみ、さて、コーヒーをすすっていると、急に自分がこれから何をしていいのか、自分の前には白紙の時間が拡がっているという、珍らしい事実に気が付いた。実際、文筆によって長年、生活の資を得ている私の生活は、綿密なスケジュールによって分割されており、東京の書斎には雑誌連載の評伝の仕事が待ちかまえている。しかし、この高原のホテルでは、厖大な資料を必要とするその仕事には手のつけようもなく、私専用の原稿用紙も軽いボストン・バッグのなかには入っていない。これは私の何十年来、滅多にない状況である。そして私は、その空白な、そして無限かと思われる時間を前にした、肺に空気をいっぱいに吸いこみたくなるような、ゆったりと拡げた気分のなかで、自分がいつか半世紀以前の、この高原での夏休みの、あの贅沢な時間の浪費の感覚を思い出していることに気がついていた。その感覚にうながされて、私はホテルの裏の林のなかに、外套の襟を立てて、歩み入ることになったのだった。まったく、それは異常な気分のなかだったので、正常だったら、直ぐ風邪をひく近頃の老化現象のとりことなっている哀れな肉体を思いや

って、そのような無茶をする筈はなかったのである。

しかし、戦前の学生時代の自由感に胸をふくらませた私は、わずかな小鳥の足跡のほかには何の痕跡もない、奇麗に敷きつめられた雪を踏んで、次第に梢の切れ目のしたを辿って、林の奥へ入りこんで行った。それはいま思えば、「入りこんで」というより、何か向うから不可思議な力によって、身体が惹きつけられて、操り人形のように歩みを運んで行ったと言った方が、その時の状況に適応しよう。

時々、私の頭上には、枝から雪がばさりと落ちてきて、外套の肩に当るのが、青年のように快かった。やがて私の短かい都会用のブーツのなかには、雪が侵入して来て、足が濡れはじめ、梢のしたの積雪も深くなりはじめた時、木々のあいだをすかせて、この別荘地によくある木造のコテイジの一軒の窓々から、明るい電燈の光りが溢れ出ている光景が見えて来た。

これも、いま、この炉端で思いかえしてみると、いかに雪におおわれた木々が屋根のうえを覆っているとしても、午後は日射しは木洩れ陽となって、むしろ純白の雪の上を徨(さまよ)っていて、あの洋館が煌々と電燈をともすほど、室内が暗くなっていた筈はない。だから、あの窓から溢れ出ていた電光は、そのまぶしい光りによって、あたりの時間を現実の午後のひと時から、幻想の夜のなかへ滑りこませていたのだった。

そして私は、その建物の玄関の敷石の上に立ち、厚そうな木の扉に垂れている、栗鼠の形をした木のノッカーで、その扉のやはり二匹の栗鼠の戯れる姿を浮彫りしてある上を敲いた。断

っておくが、特別あつらえのてれやである私が、未知の家の扉をいきなりノックするなどというのは、その習慣にはないところである。だから、その玄関の敷石に歩み寄ったというのも正確な表現ではなく、実は私の意志はその時、麻痺していて、――だから人見知りというような性癖も眠ってしまっていて、――そのコテイジの窓の明りに惹き寄せられたのである。それも未知のものへの好奇心というのでなく、心の奥の郷愁に似た感情に酔わされてであった。

私ははるばる帰りついた懐かしい故郷の家の玄関を敲くようにして、その見知らぬ家の厚い扉をノックしたのである。しかし、その栗鼠の形をした木のノッカーと、扉の中央の、私の眼の高さのところに刻まれた二匹の同じ小動物とは、私のなかの郷愁を更にかりたてたのである。

この可愛い森の妖精を何よりも愛した女性が、かつて私の傍らにいた、というほとんど肉体的な親近感のようなものが、私の胸にこみ上げて来た。そして扉が中から開かれ、当のその女性が、若々しい、そして昨日別れたばかりのような笑顔で、私を招じ入れたのである。

玄関に腰かけて、濡れたブーツを脱ぎなやみながら、私の心のなかで彼女と会わなくなってからの数十年の歳月の空白が、砂時計の砂がガラスの容器を満たすようにして、胸のなかで埋められて行くのを感じた。そして、昔のように私の肩を押しながら、スキップするような足どりで、廊下を導く彼女は三十歳になるやならずの、生命力と若さとに満ちあふれており、そし

て案内されている私は二十歳を過ぎたばかりの、まだ人生に対して希望と不安とに全身をひたした若者だった。

彼女は私を真赤に燃えた炉の前にじかに坐らせた。炎からは何ともいえない、かぐわしい匂いが拡がっていた。「白樺の枝を燃しているの」と、彼女はそれが癖の――懐かしい昔の癖の――深い、人の心を溶かすような微笑とともに、私の顔をのぞき込むようにして言った。すると、私の肩にやさしく力が加わった。そして小さな女の子の顔が、背後から私を覗きこんだ。「あなたの子供よ」と、女は相変らずの朗らかな声で言った。なるほど、その面差しには、眼もとや顔の輪廓にも、私の小型のような感じがあり、それが額の形と眼のなかに湛えられたいたずら好きの微笑に見られる、女の特色と巧妙に溶け合っていて、彼女と私との「愛の結晶」であることが、明らかだった。私は首に巻きつけて来た幼女の手を掴んで引き寄せ、膝のあいだに坐らせた。和やかな故郷の家という平和な思いが、いよいよ強く私に迫って来た。

そこに、部屋の奥の白木の扉が急に開くと、半ズボンの小児が、そう、私の膝のあいだの小娘よりわずかに年かさの、小学校に入ったかどうかという年頃の男の子が、勢いよく駈けこんでくると、「お父さん！」と叫んで、彼は強く私の背を両手で揺り動かし、いかにも満足そうに、小児特有の明るい笑いを響かせた。

「ようやくこれで、親子水いらずで、一緒に暮せるわね。あなたがあんなに無理を言って、私

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com